

学び方を学ぶ

総合的な学習の時間

—こどもの興味・関心に基づく課題解決学習—



北海道教育大学岩見沢校理科教育研究室・

岩見沢市立メープル小学校

学び方を学ぶ総合的な学習の時間
— こどもの興味・関心に基づく課題解決学習 —

<この冊子をお読みくださる方へ>


この冊子は、北海道教育大学岩見沢校理科教育研究室と岩見沢市立メープル小学校によって、1999～2001年度に行なわれた共同研究の成果にもついています。2002年から完全実施される新学習指導要領では、教科教育の時間の大幅な削減と総合的な学習の時間の導入が注目を集めています。特に、総合的な学習の時間については、こどもの興味・関心から出発する課題解決学習などの体験学習的な要素を取り入れることが期待されていますが、はたしてそのような学習形態が、学校現場でうまく機能するのかどうかを危ぶむ声も多く聞こえてきました。

私達は、そのような中で

- 1) こどもの興味・関心による個別テーマ（フリープラン）の課題解決学習
- 2) 学習内容ではなく、学習方法の修得に重点を置く教育活動のあり方をテーマとして、文字通り手探りの追究を行ってきました。

私達の研究には、付属学校や研究パイロット校などではない市中の普通の学校での実践として、ある程度の希少価値があるのではないかと考えています。そこで、研究はまだ完成の域には達していませんが、仮に小規模校の一実践報告に過ぎないとしても、情報を提供していくことに意義があると判断し、現時点での研究総括のダイジェスト版としてこの冊子を作ることにしました。私達は、ご覧になられた方から多くのご意見をいただいて、研究がより深まることを期待しておりますので、是非忌憚のないご意見をお寄せいただき、私どもの討論におつきあいくだされば幸いです。

研究代表者：北海道教育大学岩見沢校理科教育研究室 能條 歩



**スタートは指導者の
“概念転換”から**

完全フリープランによる課題解決学習は 実現可能ぞ

- ✓ 完全フリープランとは、課題解決における課題を教員が用意するのではなく、こどもが自分の興味・関心に基づいて組み立てて取り組むものです。
- ✓ いろいろと難しい実践ではありますが、
 - ・（教員がさせてみたいことではなく）こどもがやってみたい課題にとりくむ
 - ・探究内容そのものを学ぶのではなく、探究の方法論を学ぶ活動と位置づける
 - ・課題を解決できなかったとしても失敗と考えない
 - ・完全なこども任せの体験学習としないなどを前提とすることで、実施は十分に可能です。

「知らない事には対応できない（教えられない）」という姿勢から脱却します

- ✓ 完全フリープランだと、教員がよく知らないことをこどもが課題にすることがあります。そのような時には、「自分には指導しきれない」と不安に思う場面が出てくるでしょう。しかし、「こどもと共に学ぶ」という姿勢を持てれば大丈夫。先生は必ずしも「教える」だけが仕事ではないはず。 「育てる」部分に力点を置き、自分の知らないことを課題にしたこどもには、多いに学ばせてもらいましょう。こどもと一緒に探究を楽しむ気持ちが大切です。

「“学び方を学ぶ”という方式には教えるべき内容がない」というのは、誤解です

- ✓ 教科教育では、それぞれ考え方や学び方に関する独特の方法論（お作法）があります。こどもも先生も、暗黙のうちに、国語の時間には国語の、理科の時間には理科の方法論をもって授業に臨んでいます。ですから、そこでは「どんな方法論を用いて課題を解決するか」はほとんど問われません。このように、こどもたちには「ある場面で、どんな探究方法を選択するか」を自分で考えて実行してみるという機会があまり与えられていないと思いませんか？このことが、学校で学ぶさまざまなことを日常生活にうまく生かすことができない原因の一つではないでしょうか。

- ✓ ところで、現実の社会生活はどうでしょう。「何かをやりたい」とか「当面する問題を解決したい」などと思った時、どんな方法を用いて何をすべきかは自分で判断しなければなりません。その場面で誰かが「この場合は理科で習った考え方を使えばいいんだよ」と教えてくれるとは限りません。むしろ教えてもらえないことが多いのではないのでしょうか？こう考えると、こどもには学び方を選択したり方法論を模索させるような体験が必要といえそうです。つまり“学び方を学ぶ”という方式には、「自分の行動を自己決定させるための手段を獲得させる」という重要な教育内容があるのです。


このような学習をおこなうためには、総合的な学習の時間はまさにうってつけの時間と言えます。

こどもの話をよく聞いて、じっくり寄り添うことが、指導の基本となります

- ✓ 日常の授業では、先生がこどもに行動を指示している情景が普通でしょう。しかし、この学習形態では、「何を課題にしたいのか」、「どこまでやり遂げたいのか」、「どういう方法でやってみるのか」などについて、こどもの話をよく聞いて相談相手になったり、教わる側に回って疑問をぶつけてみたり、という場面が多くなります。必然的に、一人ひとりのこどもをよく観ることになり、こどもの違った側面に気付くことができます。

大規模校でも実施は可能です

- ✓ 学級のこどもの数が多いと、一人ひとりにじっくり寄り添うのは困難かもしれません。確かに、こどもが探究のための課題を設定するまでの期間は、個別指導が必要ですから大変でしょう。しかし、うまく課題が定まれば、もともと本人が探究したかった内容のはずですから、こどもは自分なりに何とか探究を進めるようになります。つまづきがあってもうまく進められない子も出てくるかもしれませんが、それは教科教育でも同じことで、特にこの方式の困難性ではないはずです。繰り返しになりますが、課題を解決することではなく、方法論を学ぶことを第一に考えれば、つまづきも失敗ではなく重要な経験なのです。



課題設定における基本設定

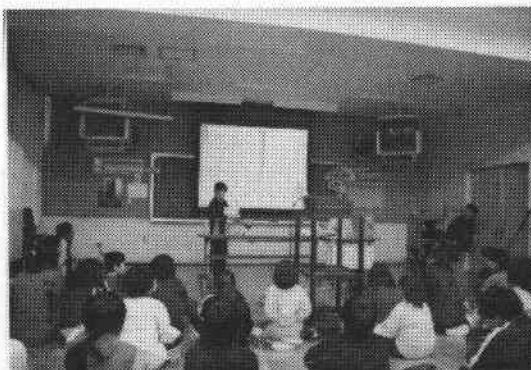
・興味を持続させ、主体的に探究させるために・

今、取り組んでみたいことをさせる

- ✧ 何かを調べて探究する要素が強い課題解決学習が多くなりがちですが、「〇〇ができるようになる」式の探究とすることもよしとしましょう。その場合、「どのように取り組んだらうまくできるようになるか」も追究してもらいます。
- ✧ 「上手に〇〇ができるようになる方法を探す→もっと（自分に適した）よい方法を考えてみる」、という展開にも、こどもは楽しく取り組めていました。

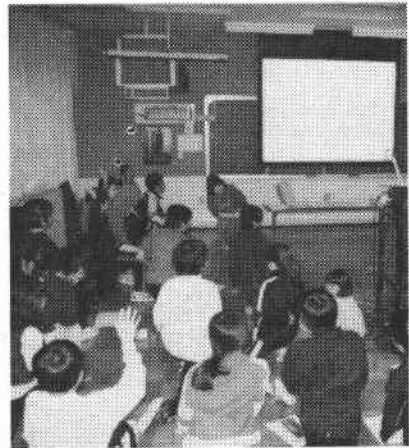
調べるだけでは終わらない課題に

- ✧ 「どうしてそうなのか」という視点を持たせ、テーマに関する因果関係を検討できるような課題にさせましょう。また、他の事例はあるか、条件をどのように変えたら望みの結果が得られるか、など広がりを出せるようなアドバイスを心がけると、こどもの探究が深まります。




課題が変化することも可とします

✧ 探究の過程において、最初の課題から興味の対象が移動していくことがあります。それによってはテーマを変えたいことがあります。それも認めましょう。ある程度自由度が高くないと苦しくなります。最初からよい課題を見つけられるとは限りませんし、取り組むうちに課題設定の仕方を学んでいく、というやり方もあり得ますから。



途中で別の課題に変更してもよい

✧ フリープランの場合、探究活動が行き詰まる場合があります。その場合、その時点でのまとめをして、新たに全く別の課題に取り組むことも認めましょう。結論を得るのは二の次で、方法論を学ぶことが目的の学習ですから、それでも目的は達せられるはず。ただし、それまでの探究内容のまとめはきちんとさせる必要があります。「どんな方法ができれば（どんな道具があれば）解決できたか」、「今度同じような課題に取り組むとしたらどうやればいいのか」という視点をおりませず考えさせるとよいでしょう。



**課題解決学習に取り組む
ための留意点**

「興味・関心」から「探究（具体的検証）可能な課題」への転換が重要です

- 具体的なもの、調べる対象がはっきりしているもの、確認実験のための条件設定が可能なもの、課題にかかわる因果関係が明確なもの、身の回りに関連する事象があるもの、が望ましいかたちです。このようなスタイルになっていない課題は、関連する部分から前述のような課題形式に転換させましょう。

例：野球について

- ホームランが打てるようになるためには
おいしいおやつについて
- チーズを使ったおやつの開発

課題設定には十分な時間をかけます

- ウェビング（11・18ページ参照）や中間発表会での討論、あるいはポートフォリオ・カンファレンス（19ページ参照）などにより、具体的で発展性のある課題を作り上げなければなりません。ここがきっちりしていないと主体的な探究はできませんが、課題設定が理想的に行えた子は、自力でも着々と探究活動を進行させてくれます。課題設定期間には1～2ヶ月程度の時間的余裕を持ちましょう。
- 急に「さあ、課題を見つけましょう」と切り出すのではなく、日頃から、さまざまなものに対する興味・関心を探究課題として意識できるような動機づけを行っていくことが必要でしょう。

こども同士の成果の交流が、探究をより深く実のあるものにします

- 中間発表会でのプレゼンテーション，ポートフォリオ式の情報整理，壁新聞の作成などによる情報発信を心がけ，それに対する反応・議論の中から次のステップへのヒントをつかめるように指導します。他人に説明することは情報の整理を促し，探究の不足している点を浮き彫りにするので重要です。そこでの先生や友達からの質問や評価が，こどもの探究活動に深まりを与えるでしょう。

結論が得られなくてもよしとします

- 学期・学年の終わりになっても，はっきりした結論が得られず，課題解決が中途半端になることがあります。また，適切な方法論を選択しなかったために結論が得られない場合もあります。これらの場合は，「どういう方法論で探究したら失敗したか」，「この次取り組むとしたらどういう方法論で取り組めば成功するか」という観点でのまとめをさせれば，探究の過程が無駄になることはありません。
- もちろん結論が得られて課題が解決されるほうがよいのですが，「この学習の目的は方法論を身に付けることにある」と割り切って，のびのび取り組みましょう

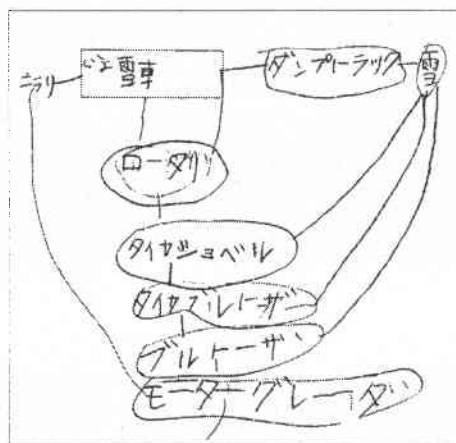
教員は、指導者というよりカウンセラーとしてかかわる場面が多くなります

- 探究活動の落とし所を推定するのは必要ですが、それに向けての指示・指導はなるべくやめましょう。この点は教科教育と大きく異なる部分です。できるだけ、聞き役・質問役・討論の相手役に徹します。
- 教員の助言は、「複数の探究方法の提示（それらの長所・短所を含めて）」、「取りまとめや情報整理のしかた」、「情報や調査結果の信憑性の評価」、「他のこどもとの議論の誘発」などにとどめ、カウンセラーに近い立場をとります。そうでなければ教員の研究活動になってしまいます。「先生も答えを知らない未知の問題に取り組んでいる」というドキドキ感をこどもも教員も楽しんでほしいと思います。

参考：ウェビングとは??

ウェビングは、あるテーマから、関連する事項（例えば調べてみたいこと・やってみたいこと）を次々と導き出す、一種のブレインストーミング的な手法です。ウェブ（クモの巣）状に関連する事項を連結することで、探究活動の方向性を見定めたりすることに利用できました。また、こどものテーマが漠然としていて、どんなことに取り組みたいのかがみえてこない時にこの手法を用いることで、こどもも指導者もイメージが広がって、興味の方角性をはっきりさせることができました。

詳しくは、加藤・佐藤編（1999）などを参照してください



<ウェビングの例>

このこどもの場合、当初は「除雪車」をテーマにしたいということでしたが、このウェビングにより、興味の方角性がむしろ大型車両にあることがはっきりして、最終的には「大型特殊車の免許をとる方法」というテーマに落ち着きました。

総合的な学習の時間の カリキュラムづくり

1・2年生は生活科を中心に原体験学習

→発達段階的に、見通しを持った課題解決が難しい年ごろです。

→上位学年において多様な価値判断をするためには、多くの原体験が必要です。原体験が乏しいと、課題意識を持つことも方法論の獲得もおぼつかなくなります。課題を解決する以前に、課題に結びつけられるような“発見体験”を、この時期に可能な限り多く持たせる必要があるのです。

3・4年生は「調べ学習」を中心にした課題別学習

→“調べる”ということ自体を経験していない場合が多いようです。この場合の“調べる”には、“やってみる”・“探してみる”・“収集する”・“分類・区分する”などを含みます。

→学級単位で大テーマを持ち、そのもとに関連性のある個人別の課題をもって取り組むのがよいようです。完全フリープランだと、それぞれが関連性の薄いテーマになりがちで、こども相互の情報交換が少なくなり、互いに学びあうという側面が著しく弱くなることがあります。

→大テーマの設定は、こどもの意に沿った方法で決定しましょう。小テーマは、基本的に大テーマに関連づけられれば個人別テーマで構いませんし、グループでの探究でもOKです。

5・6年生は「個別フリープラン」による課題解決学習

→テーマの設定から挑戦させましょう。

→テーマ設定の段階から探究方法を検討させ、テーマが“解決可能な課題（文言）”となっているかどうかをチェックしましょう。



・実践記録編・

岩見沢市立メープル小学校

「メープルタイム」

1. ねらいと概要

前述の通り、「自立」のための「個の能力・資質の育成」をはかる取り組みとして、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、問題を解決しようとする」活動を「メープルタイム」という名称として、本研究の中心とした。具体的に、個を主とした「フリープラン」による取り組みを行うことで、

- ①課題設定
- ②問題解決
- ③分析、評価
- ④応用、創造

の力を身につける。ここでは「結果」を出すことではなく、「学び方を学ぶ」ことを目的とした。もちろん、子どもたちにとっての目標は、自ら立てた「課題」を追求し、達成する事であるが、極端に言うと、子どもたちが課題を達成できなくても良いのである。そのときに、「なぜ、課題が達成できなかったか」を考え、次の活動につなげることが必要なのである。もちろん、子どもが課題を達成できるように「共に方法を考える」ことは必要である。しかし、答えを示唆することや、安易に方法を教えることは厳に慎むよう配慮した。

2. 総合的な学習を支える様々な取り組み

このような活動を行うためには、子どもたちにある程度の能力があることが望ましい。「調べ学習」や発表技術、情報活用能力などについて、これらすべてを「総合的な学習」の時間だけで育成することは不可能である。また、現在の5・6年生には、取り組みから2年しかたっていないために、3年生からの積み上げがない。そのため、必要な資質・能力を「総合的な学習」の時間とともに育成することを目的に、本校では様々な取り組みを行ってきた。もちろん、以下の取り組みは「メープルタイム」のためだけではなく、他の活動との連携も視野に入れてのものでもある。

①教科との関連

日常的な教科学習の中でも「調べ学習」や「情報活用能力」の育成のための取り組みを行っている。また、1・2年生においても後述する「生活科」の中での取り組みを行っている。

②小規模・複式活動の充実

複式における「間接指導」による学習形態は、主に、複数学年のため利用されているが、単式における数十人規模のクラスにおける個人差を考慮した授業等にも応用できる。このように、本校では、複式についても研究し工夫している。

③企画係

本校では、委員会活動のかわりに、「企画係」というものを設置して子どもたちの「企画・実行力」の育成を行っている。これは、何かやりたいという「企画」をたてた子どもが、「児童総会」で認証されて、「実行委員会」を組織し運営するというものである。

④指導体制の工夫

②などにも関わるが、本校では「全職員」での取り組みを行うために、

- ・ITの積極的導入
 - ・合同授業
 - ・弾力的な時間割運用
- などを実施している。

運用例

⑤時間の確保

上記④とも関連しているが、日課表等の見直しを行い、より活動しやすい体制を作っている。一つ目は、朝の15分間を2週間ごとに個人で計画を立てて活動する時間としている。どのように活動しても良いので、企画係でもや学習でも良いのである。学習のための支援として全学年分のプリントを用意し、自分の学年にかかわらず活用できる体制なども作っている。もちろん、「メープルタイム」の課題によっては、継続的な活動も必要なものがあり、そのような場合にもこの時間を活用できる。二つ目は、1週間のうち、1日を4時間授業とし、放課後活動の時間を確保している。ここに活動を入れるのではなく、時間として確保しているだけなので、帰宅しても良いし、企画係で使用しても、遊んでも良い。三つ目は「ロングタイム」の導入である。

⑥学校外の人材・施設の利用

地域や教育大学岩見沢校との連携を主として学校外の人材や施設の利用を積極的に行っている。日常的な交流や授業などを行うことで、子どもたちに広がりを持たせることができる。また、このネットワークを利用して「メープルタイム」の取り組みに活用もしている。



⑦情報活用能力の育成

情報活用能力の育成は、総合的な学習のねらいの一部でもある。しかし、ここで言う情報活用能力とは「コンピューター教育」ではない。コンピューターやインターネットなどは、あくまで機器の一つであり、操作技術の習得はその主目的ではない。特に小学校においては、「活用法」を学習すべきであり、このことは、本来の意味での情

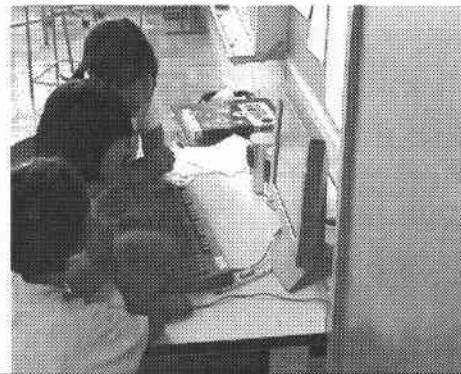
報活用能力の育成でもある。もちろん、本校においても様々な情報機器が導入されており、総合的な学習だけではなく、様々な場面で活用されている。しかし、コンピューターやインターネットには、大きな問題点も存在している。

ア. ホームページでの情報の収集には、「必要な情報を取捨選択する」能力が必要であり、「情報の有用性」を判断するための能力も必要となる。ホームページは、作成者の主観によって作成されており、伝えたい情報しか書かれていないためである。

イ. 提示装置としてのこれらの機器は、表示しているときにしか情報を発信できないという欠点も持つ。模造紙等に書かれた情報は、その場面がすぎても情報を発信し続けることができ、後で振り返ることもできるので、その点ではむしろ有用性が高い。

この他にも、活動が単一化してしまうなどの問題点が存在する。実際に、子どもたちの活動を見ると、コンピューターで得た情報の検証を行っておらず、「ホームページに書いてあった=正しい情報」としている。また、真偽が見極められない商品などの情報を集めたりもしている。しかし、適切な指導とともに、根気よく使わせていると、次第に「インターネット」だけでは得たい情報を得ることができないことがわかり、次第に活動を広げていくようになる。

また、技術習得が不必要であるというのは、使えない子も使える子に聞いて使えれば良いのであり、全員が必ず使いこなせるようになる必要はないと考えるからである。その子どもが本当に必要であれば自分から使うようになる。そのときに教職員が子どもの要求に応じて指導できればよいのである。つまり、技術習得は子どもに必要なのではなく（事実、子どもはほとんどあつという間に使えるようにはずである）教職員の方にこそ必要なのである。



メープルタイム「研究内容」

1999年度の取り組み



開校した年でもあり、十分な研修ができない中、統合前に行われていた稲作活動やコンピュータを使用した情報活用能力の育成及び、恵まれた自然環境を生かした実践などを試行錯誤で行っていた。同時に理論研究も進め、メープル小学校の子どもたちに必要な資質・能力は、「個を主とした自己教育力の育成」であると判断し、教職員全体でさらに研修を深め、その資質・能力を育てるための具体的な取り組みを計画した。また、3年生以上の総合的な学習のために、1・2年生でも基礎作りを行う必要があると考えて、生活科の中から単元目標がメープル小学校の総合的な学習のねらいと、同じようなところを抜き出して生活科という教科の中で総合的な学習に向けての基礎作りができないかを考えた。

2000年度の取り組み



前年度の理論学習・実践を経て、「フリープラン」による個を主体とした子どもの興味関心に基づく課題解決学習を総合的な学習の中心にして研究を進めた。個人単位で活動し、課題は完全に自由として、「学び方を学ぶ」取り組みとした。そのため、課題は途中で変更しても良いとし、教職員も共に解決方法を探っていこうという基本方針の基にスタートした。実際には、ほとんどが「調べ学習」になってしまい、本当の意味での「広がり」が出てきたのは終盤であった。また、この取り組みでは「課題設定」の占める割合が非常に高く、本当に興味のある課題を設定できた子どもは、自ら工夫し継続的に取り組むこともわかった。反面、興味・関心を解決可能な課題に変換することは大変難しく、その部分での働きかけの工夫が必要であることがわかった。具体的には、課題設定の時間を十分にとること、中学年では基礎としての「調べ学習」を充実させること、このような発想で教職員がともに取り組むためには、アドバイスや支援の仕方など、多くの学習が必要であること、また、教職員全体での交流・意思確認が細かく必要であることなどである。また、「調べ学習」や「インターネット」に偏っている取り組みに広がりを持たせるために、課題設定時からの多様な刺激（＝複数指導者の配置や学校外人材の活用）も必要であると考えた。また、1・2年生の生活科の中での取り組みも、総合的な学習と同じような取り組みで行ったため、基礎がない子どもたちは「何を」やって良いかはわからず、難しすぎたという反省から、次年度は、あくまでも生活科という教科の目標を達成する過程で、総合的な学習に必要な資質を育てる取り組みとすることとした。

2001年度の取り組み

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
取り組み	課題設定	課題設定	課題設定	活動	活動	修正活動	活動	まとめ	まとめ
時数	6	8	12	4	2	12	8	6	12
集会			課題交流			中間交流			最終発表



3. 活動計画と基本方針

105・110時間ある総合的な学習の中で70時間分を上記のように割り振って年間を通して取り組んでいる。基本的に、

- ①課題は、子どもの興味関心を基にして、自由に設定できる。調べものだけでなく、「できるようにしたい」等、何でも可。
- ②課題は取組中に変更しても可。その場合は経過を考察させ、次の取り組みへつなげる。
- ③基本的には個人で課題に取り組むが、目的等によってはグループで取り組んでも良い。ただし、まとめは個人ごとに行う。
- ④子どもの目的はもちろん課題達成だが、この学習は、自己教育力の育成が目的なので、必ずしも課題は達成できなくても良い。

その場合、なぜ達成できなかったか、きちんと自己評価をして次へ生かすようにする。そのためには、指導というよりも共に解決方法を試行錯誤を重ねながら学んでいく姿勢を教職員側が持たなければ、多様な課題に対応できない。

- ⑤発表するための取り組みではない。自己の興味関心をもとにした取り組みなので、あくまでも子どもに課題解決に対する意欲を持続させ、最終的には課題に対する何らかの達成感がなければならない。

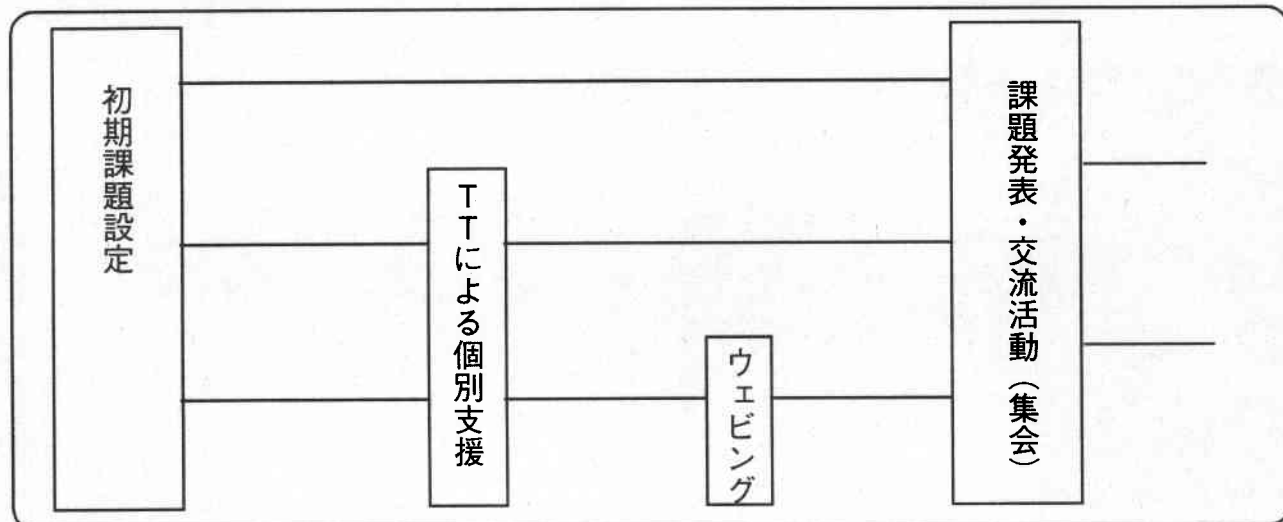
を全体で確認した。また、前年度までの取り組みから、

- ①3・4年生は調べ学習的になっても良い。5・6年では探究を広げる学習にする。全学年を通じて、教科などで「調べ学習」などの取り組みを行うことで、より、発展させる。
- ②1年間で完結するという考えではなく、継続的な取り組みを想定した支援を行う。
- ③課題設定の部分はこの取り組みでは重要な位置づけである。本当に興味のある課題が設定できれば、自ら工夫しどんどん取り組んでいく事が過去の取り組みから判明しているからである。よって、課題設定に時間をかけ、興味関心をうまく課題化できない子どもへの働きかけに関する研究を深める。
- ④課題設定後も継続的に取り組ませるためには、様々な働きかけが必要である。
- ⑤最終的に、子ども自身が何らかの達成感を持つために、自己評価に関する取り組みを行う。
- ⑥特に、子どもに対する刺激が多い方が良いと考えるので、学校外への活動の広がり（地域、大学等の積極的利用など）を促し、TTの導入、教職員間の交流や解決方法に関するアドバイス方法等の学習をする必要がある。

以上を基に、実際に取り組むにあたって、3つの部分に分けて研究を行った。



メープルタイム「課題設定」



4. 課題設定

4月～6月までの期間を課題設定にあて、時間を十分にかけて興味関心を課題にするようにした。上記のような取り組みを計画し、基本的には学年毎に段階を設定しつつ、個に応じた支援活動を行った。

(1) 前年度からの「構想」を持っている子や課題をすぐに設定できた子どもは、具体的な取り組みを行いながら課題の修正を行う事とした。

(2) 興味関心をうまく課題にできない子どもを主な対象とした全職員によるTTによる個別支援活動を2週間にわたって行った。全職員が2人以上交代で課題設定支援を行い、個に働きかけた。働きかけた子どもの内容は記録し、その後、交流することで次の支援活動の指針や資料とした。

(3) webbingの活用

子どもの思考を整理する手段の一つとしてwebbingを導入した。webbingで作成したシートは、課題設定するときに支援資料としても活用した。

「webbing」とは、インターネットでおなじみの「web」という言葉からわかるように「蜘蛛の巣」のようにつながりを広げていくという手法である。空知教育研究所でさかんに取り組まれていた「イメージマップ」の手法とほぼ同様なものである。「キーワード」を中心に、思いついた言葉を次々とつなげていき、そのとき、お互いに関係すると思うものは、線で結んでいくというものだ。こうすることで、自分の思考・したいことがはっきりしてくるので、次の活動の方向性を見つけやすくするというものである。

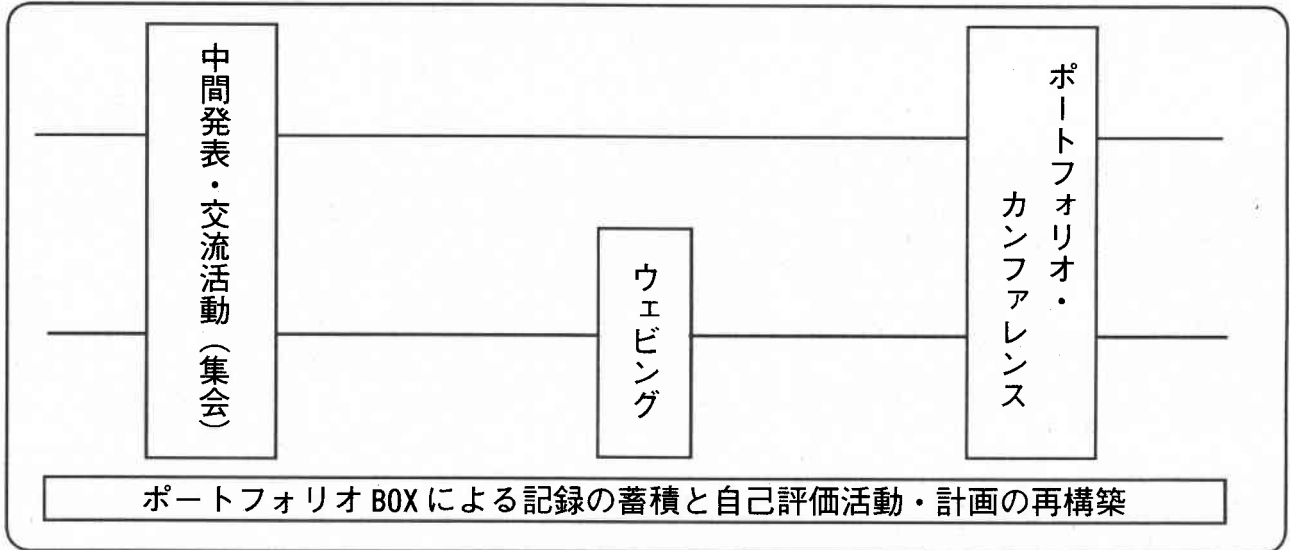
もちろん、自分で書いた事柄を整理して方向性を見つけることができれば言うことはない。しかし、実際に「webbingシート」を作ってみるとわかるのだが、案外難しく、子どもたちにwebbingをいきなり実践することはかなり無理がある。そこで、日常の学習活動にも発想整理法の一つとして取り入れておくことが必要である。

具体的には、共通のテーマで「webbingシート」を作成し、数人のグループで整理させ、発表させるなどの工夫を日常的に行うことが望ましいと考える。

(4) 課題の交流

「課題交流」することで、自分の課題についてじっくりと考察させるとともに、他の人にも聞いてもらい、自分の取り組みに生かすことを目的として設定した。同時に発表技術の育成や、同じような課題を持つ子ども同士との刺激の場としても活用した。

マップルタイム「課題解決」



5. 課題解決

6月までに自分にとって見通しを持った(最終的に何をしたいか・できるようになっていたか)をきちんと自分なりに持った課題設定ができれば、課題解決に対する支援活動は、子どもの要求に応じた対応を行えば良いのであるが、実際には「何をやって良いかわからない」子どもが多数いる。そこで、

(1) 中間交流

現状までの取り組みを他の子どもと交流することで、違う考えや意見を聞き、今後の課題解決に役立てる。中間での振り返りと今後の見通しを再度構築する意味で、集会形式で発表活動を行った。

(2) webbing

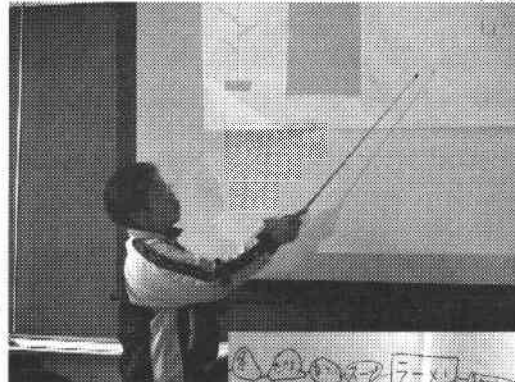
子どもの思考を整理する手段の一つとして引き続き、webbingを適時使用した。

(3) ポートフォリオ・カンファレンス

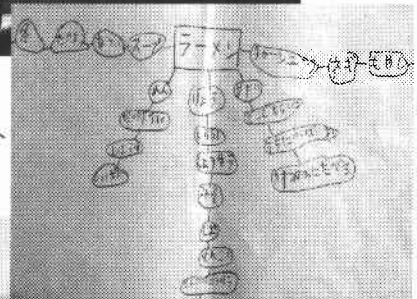
中間交流だけでは、子どもたちの意見交流が活発に行われず、目的を十分に達成できていないことや、教職員の支援が十分に生かせないことから、少人数によるカンファレンスを導入した。子ども4、5人ずつに対し、教職員を2人

ずつ配置し、ポートフォリオBOXを活用して、取り組み概要の説明を行い、教職員を含めたカンファレンスを行った。

中間交流発表



webbing シート



ポートフォリオ・カンファレンス

＜参考文献など＞

この冊子では、ページ数の関係でこれまで公表した論文・記録については特に紹介しませんでした。以下に、この実践の理論建てなどに関する文献を記しますので、関心をお持ちくださった方は是非ご一読ください。

- 能條 歩（1999）総合学習の理念と可能性に関する考察－個性化の方向性と導入上の方法論－。’99 北海道教育大学岩見沢校教育研究大会 研究紀要，25-34.
- 能條 歩・柳田英俊（2000）総合的な学習の時間の理科的展開－探究課程を重視した科学教育を志向して－。理科の教育，49（5），12-16.
- 能條 歩（2001）総論：総合学習の理念と可能性－実践にあたっての方法論試案－。平成 12 年度北海道教育大学岩見沢校研究協力校推進委員会研究報告，1-11.
- 能條 歩・柳田英俊（2001）こどもの興味・関心から出発する課題解決学習－平成 12 年度研究協力中間報告－平成 12 年度北海道教育大学岩見沢校研究協力校推進委員会研究報告，13-19.
- 能條 歩（2001）コンピューター教育から情報教育への転換－総合的な学習の時間と情報教育。平成 12 年度北海道教育大学岩見沢校研究協力校推進委員会研究報告，21-26.
- 柳田英俊（2001）総合的な学習「メープルタイム」への取り組み。平成 12 年度北海道教育大学岩見沢校研究協力校推進委員会研究報告，27-43.
- 岩見沢市立メープル小学校（1999）「子どもの可能性を広げる指導法の工夫」～小規模校の特性を生かした総合的な学習の推進～。1999 年度メープル小学校公開研究大会研究紀要。
- 岩見沢市立メープル小学校（2000）「子どもの可能性を広げる指導法の工夫」～小規模校の特性を生かした総合的な学習の推進～。2000 年度メープル小学校公開研究大会研究紀要（CD-ROM 版）。
- 岩見沢市立メープル小学校（2001）「子どもの可能性を広げる指導法の工夫」～小規模校の特性を生かした総合的な学習の推進～。2001 年度メープル小学校公開研究大会研究紀要（CD-ROM 資料集付）。
- 加藤幸次・佐藤 有（1999）児童・生徒の興味・関心に基づく総合学習。黎明書房。

「研究協力校」制度に関する研究プロジェクト報告書 part 1

学び方を学ぶ総合的な学習の時間

－こどもの興味・関心に基づく課題解決学習－

平成 14 年 3 月 29 日 印刷・発行

執筆 能條 歩（北海道教育大学岩見沢校理科教育研究室）・
岩見沢市立メープル小学校

発行 北海道教育大学岩見沢校研究協力校推進委員会

〒068-8642 岩見沢市緑ヶ丘 2 丁目 34 番地

TEL. 0126(22)-0345（取扱担当事務庶務係）・0126(32)-0400（理科教育研究室直通）

